

ドナウ の 四季

2013年・秋季号・No.20

目先の損得を追う時代はもう過ぎた	盛田 常夫	1
ネコを日本に持ち込むためのABC	坂梨 正典	2
闘わない闘病記 (3)	佐藤 経明	4
明治期におけるハンガリー人による日本語文典・会話集		
	アルベケル アンドラーシュ	6
今年のブック・ウィークのハイライト	ケレケシュ ジュジャ	7
留学生自己紹介	古賀 美代子・鈴木 美枝子	8
日本人留学生状況と動向	桑名 一恵	10
子供と遊ぶボランティア「日本語広場」	栗田 順子	10
ブダペスト日本人学校ふれあい大運動会		
	弘田 うらら・坂下 竜一・中野 佑紀	12
欧州サッカー事情	盛田 常夫	13
ゴルフ雑感@ハンガリー	町野 憲善	14
3回目の四カ国対抗親善ゴルフ大会を終えて	畑山 建吾	15
スポーツ行事・運動サークル情報		16
『夢』で繋がる熱い思い ～ in 鈴鹿サーキット～		

目先の損得を追う時代はもう過ぎた

盛田 常夫

温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

- 第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価
- 1.1 ハイパーサーミアとは何か
 - 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
 - 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
 - 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア
- 第2章 ハイパーサーミアの物理学
- 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
 - 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
 - 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存 (NTD) 効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム
- 第3章 ハイパーサーミアの生理学
- 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
 - 3.2 生体における温度制御
 - 3.3 生体の加熱と体温
 - 3.4 加熱による温度の分布
 - 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
 - 3.6 加熱と冷却：リスクとその回避
 - 3.7 温度測定と熱積算量 (ドーズ)

- 第4章 腫瘍温熱療法
- 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
 - 4.2 ハイパーサーミアの手法
 - 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
 - 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場 (コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
 - 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題
- 第5章 オンコサーミアの理論と方法
- 5.1 電場の利用
 - 5.2 細胞燃焼
 - 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
 - 5.4 ミクロスコピック加熱
 - 5.5 集束化の原理
 - 5.6 温度の役割
 - 5.7 安全性
 - 5.8 積算量 (ドーズ)
 - 5.9 臨床事例
- 第6章 自然療法としてのオンコサーミア
- 6.1 ホメオスタシスの復位
 - 6.2 細胞の自然死の促進
 - 6.3 細胞転移の阻止
 - 6.4 転移がん細胞に作用

自分が歳をとった所為か、あるいは時代の変化が感じられる所為か、最近では威勢の良い話には、つい疑念を持ってしまふ。東京五輪開催決定時は東京に滞在していたが、当事者の高揚感とは裏腹に、1964年の東京五輪のような期待感が湧いてこなかった。東京の街の様子もいたって平静だった。もう日本は発展途上にある状態をはるかに過ぎてしまったから、五輪招致を有り難がる状況にはないし、原発や震災復興の課題の大きさを考えれば単純に喜べない。日本社会はいろいろな意味で成熟期にあり、大きな歴史的転機を迎えているように感じているのは私だけではあるまい。

しかも、五輪決定の1週間前から3週にわたって、NHK「スペシャル」で東京直下型地震の可能性をめぐる特集番組を構成し、9月1日の番組では1922年の関東大地震の予言が完全に無視された経緯を詳しく報道していた。だから、東京五輪開催時に大地震が起こったらどうなるのだろうという心配の方が先に立った。五輪招聘セレモニーにおける安倍首相の英語のスピーチは、語尾が曖昧発声になる日本語に比べ、語彙がはっきりして理解可能だったが、「汚染水は完全にコントロールされている」は「嘘も方便」を超えて、「口から出任せ」の感が強い。これでは「関東大地震は起こりません」と言うのとあまり変わらない。「政府は何でも解決できます」というのは政治的デマゴギーである。

東京五輪の1964年、私は高校2年生だった。われわれ団塊世代が次第に日本経済の労働力人口に組み込まれ、高度成長が本格化する時代だ。GDPは1年間に創造される国内の付加価値総額。それを生み出すのは労働の質と量。年に200万人を超える新規労働力が次々と日本経済に投入された高度成長時代には、GDPも10%前後の伸び率で増えていった。高度成長時代は日本経済の青年時代だ。

単純に言えば、労働力の純増がなければGDPも増えない。労働人口が次第に減っていくこれからの日本は、GDPが不断に成

長する時代ではなく、漸次的に減少する時代だ。百年もすれば、日本経済のGDPは現在の半分の水準になってしまう。今、日本はそういう時代への転換期に入っている。人間の生と死のように、国の経済にも幼年期から青年期があり、壮年期を過ぎれば老年期を迎える。そのサイクルを繰り返しながら、社会が継続していく。これから百年の日本は、高度成長が造り出した多くの遺産を維持管理する時代に入る。しかも、労働力が減少するなかで、過去の遺産を維持管理しなければならないのだから、たいへんな時代に入っていく。

戦後の荒廃から復興した日本経済は、高度成長の青年期をへて、今、壮年期から老年期に向かいつつある。歳をとればいろいろな病気が見つかるように、日本経済も膨大なインフラの維持管理や50に近い原発の維持管理の問題を抱えている。それらはいずれ耐用期限を迎えるから、修理や廃棄により多くの力を注がなければならない。ところが、これらの仕事を支える財政基盤はますます弱くなっていく。巨額の財政累積赤字を抱えているにもかかわらず、租税を払える労働力人口が減少するのだから、現在のインフラを維持することは不可能だ。福島原発の廃棄ですら、当事者の東電の資金力では到底、完遂することができない。そもそも、一つの原発の廃棄にどれほどの時間とお金がかかるのか、まだ誰にも分からない。そういうものが全国に50近くもある。人口が半分になれば、鉄道網も高速道路も不要になる個所が増え、維持管理できないものは放置される。過疎化が進む町と同様に、過疎化が進む日本社会はますます多くの問題を抱え込む。

こういうことが分かっているながら、政治家も実業家も、目先の損得だけを追いかけている。経済成長が続けば、財政問題はいずれ解決されるなどという無責任な議論も横行している。高度成長のような量的拡大の時代はとっくに過ぎ去っているのに、まだ成長持続時代の思考から抜け出すことができない。人々もまた、そういう政治家たちの言動を簡単に信じてしまふ。

世に氾濫している「アベノミ(ツ)クス」なる

レトリックに政策的意図はあるが、学問的根拠はない。一言で言えば、「アベノミ(ツ)クス」は安倍政権イデオロギー。たんなる政党・政治家のレトリックにすぎないものを、マスコミが特効薬のごとく普及する役割を担っている。日本経済が抱えている問題を近視眼的に解決する方策を探っているだけで、その方策がもたらす負の効果や弊害についてはほとんど議論されない。これでは「原発は100%安全」と推進してきた戦後政治と何ら変わらない。

今の日本は、将来の難しい問題や解決不能な問題には触れないで、とりあえず短期の打開策や目先の損得を議論することで、本質問題の議論を回避している。「原発のコストは安い」というのもイデオロギーで、そこには原発廃棄にかかる費用は見込まれていない。1基の廃棄に1兆円かかるのかそれとも5兆円かかるのか、あるいはまだ計算できないほどの金額必要なのか。廃棄終了に20年かかるのか、それとも50年かかるのか。政府はこういう深刻な議論を避けて、とりあえず再稼働や原発輸出で、官民一体で原発ビジネスが潰れないようにしている。すべて問題の先送りである。

いずれ破棄が必要なものなら、何時からどのような手順で行うのか、どのように資金を調達するのかを真剣に議論しなければならないはずだ。政治家が命令したから廃棄作業が簡単になるわけではない。まして、政府が一緒になって原発売込みビジネスをやっているのは、いつまで経っても肝心な問題は先送りされるだけだ。

それは東京大震災の備えも、震災復興も同じ。東京五輪で震災復興が進むとは誰も思っていないだろう。「元氣と勇気を与える」というのはたんなる口実。一部の東京開発の事業者が儲かるだけの話だ。アベノミ(ツ)クス・イデオロギーで株価が上がり、金融投資できる一部の層が利益を売ると同じ構図だ。美辞麗句のレトリックに惑わされない賢さが求められている。

(もりた・つねお 「ドナウの四季」編集長)

ネコを日本に持ち込むための A B C

坂梨 正典

我が家はハンガリーで飼い始めたネコちゃん2匹(ヤマトとムサシ)を日本へ輸入しましたが、結構大変でした。その体験談がこれからペットを持ち帰る方々の参考に少しでもなればと思い以下の通りまとめました。但し、犬ではなくネコであったこと、当方の誤解や記憶違いもあるかもしれませんが、あくまでも参考として読んで頂ければと思います。

ハンガリーからネコを日本へ持ち込むには、細心の注意を払う必要があります。ざっくり言えば、「狂犬病予防注射と血液検査をきちんとやっていたら、成田空港で留め置かれず(最悪180日間)短時間で検疫クリアとなります。但し、関連書類作成には細心の注意が必要です」。

ペットの輸入については、農林水産省動物検疫所の以下ホームページ

<http://www.maff.go.jp/aqs/animal/dog/import-index.html>

<http://www.maff.go.jp/aqs/animal/dog/import-other.html>

に詳細がありますが、あまりにも詳しくすぎて5回位熟読しないと全体像が見えないので忍耐が必要です。

以下、項目毎に注意点やコメントを記します。

1. 獣医

先ず英語が通じることが重要で、日本へのペット輸出経験があればなおベターです。

2. マイクロチップ

これは早い段階で獣医により必ず埋め込まれますので、特にこちらから依頼する必要ありません。

3. E Uパスポート

これも、ほぼ自動的に獣医により作成されます。基本的にはE U域内のネコの移動に必要です。成田空港の動物検疫所で見せる必要はありませんが、ブダペスト空港でネコをチェックインする際見せる必要がありました。我が家はフランクフルト経由だっ

たのでE U内移動となることで見られたのかもしれない、もし中東経由等でE U内を経由しない場合には見せる必要はなかったのかもしれませんが、この点については不明です。いずれにしてもE Uパスポートには予防注射やマイクロチップの記録が記入されているので日本到着まで携帯された方が良いでしょう。

4. 狂犬病予防注射

大変重要なポイントです。日本へ輸入するには「マイクロチップ埋め込み後2回以上」狂犬病注射を行う必要があります。また、常に有効期限内に次の予防注射を行う必要があります。日本側で必要な書類に予防注射の有効免疫期間(有効期限)を書く欄がありますが、ここで言う「予防注射の有効期限」は薬メーカーが保証する期間(我が家のケースでは、ワクチンの箱に入っているハンガリー語の説明書に3年と記載されていました)であり、ハンガリー国で要求される接種間隔(確か1年だと思います)とは違うと言う点が重要になります。我が家の場合、基本的には1年以内に接種させていましたが、一度だけ1.5年間隔が空いた接種があり、その時期に行った血液検査が無効になるかと大いに焦りました(成田に係留だ!と超パニック)が、調査の結果3年以内だったので事なきを得ました。

5. 血液検査(狂犬病の抗体価の確認)

これも大変重要なポイントで、下手をすると成田空港係留となります。血液検査はネコが狂犬病に掛かっていないことを数字で示すもので、農林水産大臣が指定する検査機関で行う必要があります。日本への輸出経験がある獣医であれば、採取した血液を指定検査機関(我が家の場合、ドイツの検査機関)へ送ってくれますが、心配であれば以下のリンクで当該検査機関を確認ください。
<http://www.maff.go.jp/aqs/animal/dog/lab.html>

血液検査の数字が問題なくても、「潜伏期間があるかもしれないことから、180日

間様子を見て確かに発症しないことを確認する必要がある」と言うのが大変重要です。つまり、帰国直前に血液検査を行って結果OKでも、それから180日間は日本へ輸入できません。従って、ハンガリーにネコを置いて本人は帰るか、持ち帰って成田空港で留め置きされるかの選択となります。

一緒に持ち帰りたい場合には、帰国の180日以上前に血液検査を行う必要があります。さらに、最初の血液検査の有効期間が2年なので、これを過ぎるともう一度(2回目)血液検査を行う必要があります。ここで重要なのは、「2回目の血液検査後は180日待つ必要なく」、結果がOKであれば即日本へ持ちこめます。つまり、1回目の血液検査から180日以上経過しておりネコが狂犬病でないことは確実であり、2回目の結果がOKであることは、潜伏期間を待つまでもなく、確実に狂犬病でないと言えるからです。我が家の場合はこのケースでした。ここで重要なのは、狂犬病の予防注射を定期的にきちんと打っていることが前提になります。つまり、予防注射の有効期限が切れてしまうと、その後僅かの間に狂犬病に罹患する恐れが(理論的に)あり、いくらその後予防接種をきちんと再開しても、予防注射には治癒能力はないことから、罹患した状態が続く恐れがあるからです。

6. 日本側輸入手続き

先ずは、ANIPAS(<http://www.maff.go.jp/aqs/tetuzuki/system/49.html>)と呼ばれる電子申請を使い、インターネットで輸入の届出を行います。受理が確認されたら、ANIPASで輸入申請手続きを行うことになります。輸入の届出は「帰国予定日から40日以前に行う」ことに注意が必要です。また、輸入届出時に記載した帰国予定日の前倒し(早めること)は原則できないので(遅らせることは変更届けで出来る)、輸入届出時に帰国予定日が明確でない場合には若干早めの日付で届出を行い、後日変更届出で確実な帰国日を出すことになります。我が家の場合、一日早くなったので

すが、輸入の届出を60日前くらいに余裕を持って行ったので許してもらいました。輸入の届出に続く輸入申請手続きがきちんと確認されると申請受理書が発行されます。これは、成田空港の動物検疫所のみならずブダペスト空港でネコをチェックインする際にも見せますので、常に携帯が必要です。

この申請受理書に加え、ネコの輸入に必要な書類は、本人が書く書類Form A、ハンガリーの獣医に書いてもらう書類 Form C(ドラフトは当方にて作成しました)、血液検査結果(オリジナル)となります。

Form A : <http://www.maff.go.jp/aqs/animal/dog/pdf/CertificateA041126.pdf>

Form C :<http://www.maff.go.jp/aqs/animal/dog/pdf/certificatec100415.pdf>

Form A, Form Cはハンガリー当局(と言っても指定の動物病院であり、掛かりつけの獣医さんが教えてくれるはずです)でサインとスタンプが必要となります。ここで重要なのは、Form A, Form Cのドラフトが完成したら、動物検疫所にメール送付し、内容を確認して貰うことです。動物検疫所は先に提出した事前届出・輸入申請手続きの内容とForm A, Cの内容が合致するかどうかチェックしてくれます。(我が家の場合、2箇所訂正がありました)当局にサインとスタンプを貰ってからでは修正できないのでこれは大変助かります。

また、当局のサインとスタンプ押印済みのForm A, CをPDFにて動物検疫所へ送付し、内容に問題ないことを重ねて確認しました。これで最大のハードルはクリアです。この動物検疫所との確認作業が成田空港でのスムーズな検査に繋がるので大変重要です。

7. ハンガリー側ファイナルチェック(臨床検査)

Form Cでは獣医が輸出前にネコの健康状態を最終確認の上サインし、その後当局に書類を持ち込み(Form Aとともに)ますが、動物検疫所ホームページ上ではその時期を「出発2日以内」推奨としています。当局からすんなりサインとスタンプが貰えなかったらどうしようと心配していたのですが、動物検疫所とのやりとりで出発日「10日前

でもOK」、つまり、獣医のファイナルチェックと当局サインとスタンプは帰国10日前でも良いとのメールが来て安心でした。実際には当局にて1時間ほどでサインとスタンプ押印が済みました(予測していなかった収入印紙を郵便局へ買いに行くこととなってしまいました)。

8. ブダペスト空港にて

空港のチェックインカウンターでは、申請受理書(成田動物検疫所発行)、E Uパスポートを見せる必要があり、ペット追加料金70ユーロ(2013年3月末現在)を支払いました。なぜか、E Uパスポートの予防接種記録等を用意深く見ていました。手荷物チェックのX線が気かりでしたが、バッグからネコを取り出し、人間が抱いてゲートを通過、バッグのみX線チェックとなり、安心しました。

9. フライト及び機内にて

ネコを機内持ち込みできるのは、ルフトハンザとフィンエアーのみで、日本航空、全日空、B A等は動物専用貨物室に入れることになります(最新情報確認ください)。我が家はルフトハンザを選択し、手荷物として機内へ持ち込み、飛行中は前の座席の下におきました。水も餌も与えることはかわいそうですが出来ません。おしっこ対策として吸水シートをネコ用バックの中に敷きました。最初、みゃあみゃあ鳴いていましたが(エンジン音で他人には聞こえず)巡航中は結構寝ていたようです。

気をつけることは、飛行機に乗せられるイヌ、ネコの頭数が限られていることです。我が家の場合、フランクフルト→成田間は大型機であった為2匹OKでしたが、ブダペスト→フランクフルト間は小型機であった為1匹と制限されました。従い、家族が2便に別れフランクフルトで合流せざるを得ませんでした。フライトを予約する際、十分ご留意ください。

10. 成田空港にて

我が家は成田空港第一ターミナルに到着しました。チェックイン荷物受取場の端に動物検疫所があり、そこへ必要書類(申請受理書, Form A, Form C, 血液検査結果

オリジナル)を提出します。もちろん、ネコも見せて、実際に別室でマイクロチップの読み取りを行います。事前に書類は送っていたこともあり、思いの外スムーズで、検疫OKとなるまで1時間も掛かりませんでした

11. まとめ

(駐在中の注意点)

○ マイクロチップ埋め込み及びE Uパスポート作成

○ 薬メーカー保証有効期限内の狂犬病予防注射(2回以上)

○ 帰国日より180日以前の血液検査+検査結果入手

(日本側必要手続き・書類)

○ 輸入の届出→輸入申請手続き→申請受理書入手

○ 成田空港動物検疫所での必要書類:申請受理書, Form A, Form C, 血液検査結果(ハンガリー側準備)

○ Form A(本人書き込み)、Form C(獣医書き込み)作成

○ 出発10日前(動物検疫所に念押し確認されること推奨)から獣医のファイナルチェック(From C)

○ 出発10日前(念押し確認推奨)から当局へForm A Form Cを持ち込みサインとスタンプ入手

その後ネコちゃん達は東京の新しい棲家で平和に暮らしています。最初の2~3日は落ち着かない様子でしたが、今ではすっかり慣れて一日中寝ています。地球の裏側からはるばる移り住んだと思うと不思議な気がします。

追記:ハンガリー当局スタンプ・サイン済みのForm A, From C及び血液検査結果のコピーを「ドナウの四季」編集長盛田さんに手渡ししておりますので、必要に応じ参考としてください。(個人情報取扱注意をお願いします。)

(さかなし・まさのり 丸紅)

闘わない闘病記 (3)

2011年11月10日午後の上野医長の診察は、informed consent を絵にかいたようなもので、家内・娘同席のもと、40分もかけてコンピューターで内視鏡画像をまるでスライドショーのように見せながら、丁寧に説明してくれました。極彩色カラーの患部「スライドショー」はおどろおどろしいものでしたが、この時、私は38年前、虎の門本院に故・岡稔さん(私より一歳上、同じ専門の一橋大学経研教授、1973年9月19日歿)を死去の3週間前に同じ虎の門病院に見舞ったことを思い出していました。岡さんは最後まで肺がんを若い頃の結核の再発と思ひ込まされていたのです。患者へのガン告知無しからスライドショーへ。この間の変化の大きさが如実に感じられました。上野先生の「コンサルテーション」は毎回30分以上かけるというもので、それは今日に至るまで変わっていません。後で会計処理の時、身の縮まる思いをしたものです。私の病状は今の表記で整理するとT3N3M0というもので、T3 は以前の表記では「三期ガン」(四期は末期ガン)、N3 は5つあるリンパ腺の3つに影響(若干の腫れ)があるというもので、M0は「他臓器への転移はゼロ」(これは大きなプラス)というものでした。まあ「良くはないが、見込みが全くないほど悪いわけでもない」というところでしょうか。

この頃のちゃんとした病院・専門医は、患者のQoL(Quality of Life)「生活の質」を重視します。「手術は成功したが、患者は寝たきり生活で間もなく亡くなった」では、何のための手術が分かりません。私の親しかった旧友の弁護士にも「あの手術は果たして必要だったのだろうか」と、私が死去当時から疑問を抱いていた事例があります。こういう事例となることを避けるには、主治医と良きinformed consent 関係が必要です。

教訓3 主治医と良きinformed consent の関係を結ぶこと。ただし、「なれ合い」とな

ってはならない。ここでも「患者の権利」を忘れないこと。

病気あるいは下獄を機会に読書にふけた先人の例は枚挙に暇ありません。私も入院中は大著を読もうと決意し、前から深い関心を持っていた「ワイマール共和国の運命」に関するものを二つ、有沢広巳『ワイマール共和国物語』東大出版会・上下二巻、『余話』を含めると全三冊B6判1292ページ。ブリューニング首相の評価など、私が持っていた先入見も正されました。これとの関連で読んだのが、一般にはあまり知られていないハリー・(グラーフ)ケスラー『ワイマール日記 1918-1937』(上下、富山房、1993-94年)。A4判二段組みでびっしり、計1288ページ。桁外れの国際的教養人で、教養の該博さという点で私が逆立ちしてもかなわないと思ったのは、いずれも私よりはるか旧世代に属しますが、このケスラー伯と『パリ日記』(月曜社B6、446 ページ)のエルンスト・ユンガーでした。のちに「セザンヌを発見した男」として有名なアンブローズ・ヴォーラル『画商の思い出』(美術公論社、1980年、B6 495ページ)を読んだら、このケスラー伯の名が何か所も出てきたのには感心しました。ケスラーが亡命後、パリで同じく亡命したブリューニク元首相と鉢合わせするところは印象的です。

入院直前から邦訳が出始めたワシーリー・グロスマンの『人生と運命』(みすず書房、2012年、B6 , 1, 2,3 で計1424ページ)も読みました。フランスの「同業者」マリイ・ラヴィーニユにメールで知らせたら「私はロシア語版で読んだ」という返事が返ってきた。赤ん坊の時からバルト・ドイツ人のおばあさんのドイツ語、母親や乳母のロシア語を聞いて育った人にはかなわないと思いました。ユダヤ人として疎外され一時は投獄までされながらソ連の原爆開発に協力する、ランダウがモデル(その対極には協力しなかったカピーツァがいる)と思

佐藤 経明

しい物理学者一家を中心に、最後はすべてがスターリングラード戦に奔流のように飲み込まれていく、壮大な叙事詩的大河小説。戦時下、それも戦線で密かに語られる農業集団化批判など、スターリン時代を内部から見た興味深いところも枚挙に暇ありません。

こういうことを書いていたらきりがない。さしあたり
教訓4 は「入院中は大著を読めーそれも専門外の本を」としておこうか。

私はまた、早くから「ユーロ」危機に強い関心を寄せていましたので、入院後期に娘がThinktable なる(当時は)「新兵器」を届けてくれたこともあり、作動のまだるっこさに閉口しながら、欧州、主として独仏のウェブサイトを観ていました。

さすがに7月-8月の方は購入しませんでした。が、「人間、楽観的たるべし」と9月中旬のクラシック・コンサートのチケットは2枚、入院前に購入、退院後に訪れました。9月8日(土)オペラシティでの東京交響楽団、バイオリンのアラベラ・美歩・シュタインバッハーがお目当てでした。9月15日(土)サントリーホールも東京交響楽団ですが、ピアノのハンガリー、デジュー・ラーンキがお目当て。退院後、夜出かけるのはこれが最初となりました。

最後に、大病の場合、おそらく誰もが経験する「悩ましいこと」に触れざるを得ません。ガン患者なら皆経験することですが、病気の噂が伝わると、みな善意なのですが、いろんな人がいろんな療法を勧めてきます。なかには「コンピューターに接続した金属棒で指先に触れると、どこが悪いかがすぐ分かる」と外国人医師を推薦して来た人もありました。ほとんど「オカルト療法」なのですが、薦めて来た人は大真面目な知識人女性でした。盛田さんの「オンコーミア」も考えましたが、当時、アクセス容易な

ところに実施中の医療機関がありませんでした。「オンコーミア」が早く臨床試験(治験)段階を通過して、正規に採用されることが望まれます。

我が家に週一回来る超大ベテランの訪問ナースの話によると、怪しげな民間療法まがいに引っかけた高額の治療費(医師法でも認められている「自由診療」名目)を巻き上げられている患者も少なくないという。

何しろ医師が書いた『医者に殺されるな』と言わんばかりの本がベストセラーになっているのが今日の状況。真偽・自己顕示その他もろもろを取り混ぜて乱れ飛んでいる医療情報のジャングルを潜り抜けるのは容易ではないが、今日のがん治療が向かっている大筋の方向だけはとらえておかないと、「患者主権」は絵に描いた餅となってしまう。

まず欧米に比べて我が国のがん治療で遅れていると思われるのは、広義の放射線治療のようだ。最近では重粒子線・陽子線



が脚光を浴びている。これらを含めた放射線治療は欧米では50-60% の比重を占めているのにわが国ではその半分くらいらしい。

重粒子線・陽子線治療は一種の原子核加速器のような装置を使って患部にピンポイント攻撃をするもので、症状にうまく適合したら身体へのダメージは少ない。ただし、「先進医療」として保険は適用されないため、患者負担は少なくない(約300万円)ばかりか、今国内で実施可能な医療機関は9施設くらい。しかし、最近神奈川県がんセンターが2年後の導入を発表したように、増

加の傾向にあります。

もう一つの方向は、分子標的薬だ。従来の抗がん剤は万遍なく叩くため、正常細胞へのダメージも少なくない。これはヒトゲノム解析から開発されたもので、ピンポイントでがん細胞だけを叩くから、副作用が少ないうえに効果が大きい。しかし、わが国では臨床試験(治験)に手間取るため、国内開発の分子標的薬は寥寥たるものらしい。

三番目の方向は、東大医科研で臨床研究(治験)が始まっている、ペプチドワクチンのような免疫療法だ。世上、喧伝されている免疫療法にはいかがわしいものが少なくないが、これは正規の治験段階に入っている。しかし、患者がその治療を受けようと思ったら、治験患者グループに採用されるほかないから、当面、その恩恵に浴する範囲は限られている。

とはいえ、現在世界的にペプチドワクチン療法を巡ってしのぎを削るような治験競争が繰り広げられており、ここ5年くらいで15種類から20種類が治療薬として承認されるという見通しがあるという。ただ、海外で開発された薬だと、日本国内で採用されるには再度治験を必要とするから、いわゆる「ドラッグ・ラグ」が生ずる。いずれにしても我が国の患者は、なかなか最先端の治療の恩恵に浴しがたいのが現状だ。その「隙間」に未承認のワクチンによる高価な「自由診療」がはびこっているというわけだ。

善意の助言勧告が見落としがちなのは、「ある病状に適合」した治療法がどの病状段階にも合うとは決して限らないことだ。ある治療法はそれに適合した症例の場合に最も有効なのは論を待たない。いかなる場合にも「わが仏、尊し」では困るのです。私の場合、のちに摘出された大きな患部写真(別掲参照)を観ても、そのまま放置すれば2-3か月で食物摂取不能となったに違いありませんから、とても友人たちから推奨された療法で間に合ったとは思えません。もう一つ確かなことは、ひとりの患者にいくつもの療法を同時並行的に施すことは困難だ

ということでしょう。

一番多かったのは、抗がん剤使用をやめる/やるな/という助言でした。しかし、わが国のがん治療の最前線におられたが、最後は我が国のがん医療体制に愛想を尽かしてアメリカに「流出」した、中村裕輔教授(元東大医科研教授・国立がん研究センター研究所長、現在はシカゴ大学教授)も、声高な抗がん剤投与オール否定を批判しておられる(『これでいいのか、日本のがん医療』新潮社、2012年)。それは「オール否定」ではがん治療そのものが成り立たないからだ。教授によれば、効果が期待できる患者までが抗がん剤を拒否したために手遅れになった例が少なくないという。抗がん剤投与をやめて何年も生きている人がいる反面、その逆の悲劇もあるわけだ。抗がん剤で腫瘍を小さくしてから手術するのは、がん医療の標準的方法の一つだし、早い話、血液・リンパ液の中を高速で移動している癌細胞を叩く(弱める)には、抗がん剤を利用しないわけにはいかないからだ。何事も極端では困るのである。

教訓5 善意の推奨には耳を傾けなければならぬが、その中には「雑音」も少なくない。

それとともに患者主権に基づく「選択」は「運命」でもあることを忘れてはならない。自分が「選択」した「運命」は甘受すること。あとで「ボクが/ワタシが/ 薦めたようにしていればもっと長生きできたのに」と言う人がいるかもしれませんが、それはそう言わせておけばよろしいのです。私の場合も、私の選択が正しかったかは、もっと時間がたたないと分かりませんから、「棺を蓋って事、定まる」と達観していますが、これが拙稿の読者への最後の助言となりましょうか。

(さとう・つねあき 横浜市立大学名誉教授)

明治期におけるハンガリー 人による日本語文典・会話集

Albeker András

ハンガリーにおける日本語教育の歴史について幾つかの論文があるが、第一次世界大戦以前にどういふ風に日本語学習が行われたかについてはあまり言及されていない。そのため、以下で19世紀末・20世紀初頭の三つの資料を簡単に紹介したいと思う。



1. Szemere Attila(漢字名: 世明礼)の『日本文典』、1883年
Szemereは新聞記者・政治家・美術品収集家であり、ハンガリーにおける日本学の先駆者の一人である。1883年の半ばから1884年の初めまで横浜で7ヶ月を過ごした。帰国後、日本文化を紹介する新聞記事を著述し、講演会を開いたが、日本に関する本は執筆しなかった。彼の遺品にある

ノート類に未完成の『日本文典』(Grammaire Japonaise)の草稿がある。此れは約33ページにわたるもので、主としてフランス語で書かれている。内容は動詞の活用形、説明、例文、単語リスト、会話文である。表記はローマ字であるが、漢数字と伊呂波順のひらがな・カタカナの一覧も示されている。

草稿はMiskolc市のHerman Ottó Múzeumに保管されている。

文章例

【】内は筆者による漢字仮名表記。文によっては、読みやすさを考慮してスペースを挿入した。

Fransu ga Doyitsu ni mukatte ikusa o-shita 【フランスがドイツに向かって戦をした】

Ashita no asa roku dji ni oko shite kudasai 【明日の朝6時に起こしてください】

W. ga Biyoki de aru 【私が病気である】

2. Komor Siegfriedの独和単語集、1894年(?)

極東で活躍していた美術商Kuhn & Komor商会のKomor Siegfriedが編纂したドイツ語日本語対訳単語・会話集。序文によると、東京方言(Tokyo Dialect)が採用されているが、巻末にサンパン・シンダンジなどと言った横浜言葉の一覧表も載せられている。漢字仮名を用いず、ローマ字で表記されているが、その転写法に

tsch, schなどのようなドイツ語の綴り方が見受けられる。成立・出版回数に関して不明な点があるが、恐らくイタリア人のFarsariの英和単語集に基づいていると考えられる。

尚、この冊子にはホテル、仕立屋、床屋等の広告も沢山掲載されており、当時の外国人向けのサービスの様子が窺える。

会話文の例

Mo skuschi yassku schte okure 【もう少し安くしてくれ】

Hakone mada(ママ) mitschi-morin(ママ)ga ika hodo arimass-ka? 【箱根迄 道のりが いか程ありますか】

wataschi taksan schimpai 【私 沢山 心配】

3. Akantisz Viktorの日本語文法・会話集、1905年(?)

1905年(1906年とする資料もある)にRozsnyai社が外国語速習シリーズの一冊として日本語の文法書・会話集を出版した。筆者が確認した範囲では、これはハンガリー語で書かれた初めての日本語の教科書である。この書籍は64ページで、その内容は文法篇・会話篇・辞書篇・文字篇のように4つの部分に分けることが出来る。文字篇の一部を除き、全篇がローマ字で書かれている。又、会話篇にはドイツ語訳が併記されている。

著者はAkantisz Viktorで、彼はこの『日本語速習』を執筆する際、ドイツの言語学者August Seidelの著述した『実用的日本文典』、『日本口語文典』、『日本文語文典』、『日本口語体系的辞書』を参照したと考えられる。このように『日本語速習』は主としてドイツ人向けの学習書に基づいて作成されたが、ハンガリー語話者を対象にしたため、音声のみならず、文法の説明にもハンガリー語と対照させている部分がある。

上記の資料紹介に付け加えて述べると、1895年からKolozsvár(現在ルーマニア)大学のウラル・アルタイ学科でも日本語の授業が行われたが、これに関しては未詳な点がある。今後新しい資料の発見が期待される。

参考文献:

Albeker András (2011) 「ロジュニャイ『日本語速習』の著者と出典について」『国文学論叢』 第26号 23-38頁

Senga Toru (1994) Bálint Gábor, Pröhle Vilmos és a japán-magyar nyelvhasználat története. Magyar Nyelv, 2号 200-207頁
Wintermantel Péter (1999) Szemere Attila hagyatékának orientalisztikai vonatkozású anyagai. Hermann Ottó Múzeum évkönyve XXXVIII 793-814頁

資料:

Grammaire Japonaise 日本文典 HOM HTD 73.503.35

S. Komor: Hand-Buechlein japanischer Worte und Phrasen. Dai-Butsu, Curio Grand Depot.

Rozsnyai gyors nyelvmesterei. Bármely nyelv alapos elsajátítására tanító nélkül. Japán. Gyakorlati japán-magyar-német beszélgetésekkel, hét eredeti japán-írásablával, a kiejtés pontos feltüntetéseivel.

(アルベケル・アンドラーシュ)

今年のブック・ウィークの ハイライト

Kerekes Zsuzsa

今年6月6日から10日まで、第84回ブック・ウィークと第12回児童書ウィークという祭りが行われた。国内外の出版社220社が参加し、総計147の出店があった。祭りの中心となるブダペストのヴェリヨシュマルティ広場をはじめとして、ハンガリーの様々な町で同時にブック・ウィークが行われた。私は18年前の自分の夢を叶えるために6月9日にヴェリヨシュマルティ広場のイベントを見に行った。18年前といえば、私は7歳の子どもで、母に毎日読んでもらった物語を自分で読めるようになって、初めて読書の楽しさを経験した頃だった。その頃の一番好きなお話は「冬のオオロギの物語」(A téli tücsök meséi)だった。バックバックの中に隠れていたため部屋の中に閉じこめられてしまったオオロギは、毎日バックバックのポケットから出てきて、タイプライターを階段にして部屋の窓ぎわまで跳び、冬の景色を見ながら夏の思い出を語る。そして、偶然「夏の島に戻りたい」という一つの正しい文をタイプしてしまうところでお話が終わる。

この物語を書いたチュカーシュ・イシュトヴァーン(Csukás István)は、子供のための小説や詩を70冊以上書き、ハンガリーの様々な文学賞を受賞した。テレビ化された作品も少なくない。彼の作品の中で特に有名なのは「シュシュという竜」(Süsü, a sárkány)、「ポムポムの物語」(Pom Pom meséi)、「一番小さなウサギ」(A legkisebb ugrifüles)、「硬い帽子とポテトの鼻」(Keménykalap és krumpliorr)である。作者の名前を知らなくても、彼のキャラクターを知らない子供はハンガリーにいないと思う。1936年生まれのチュカーシュ先生の描く物語とキャラクターは、少なくとも3世代の人の心に魔法をかけたといえる。6月9日、チュカーシュ先生とのインタビューを聴きに来た人はみんな自分の大好きな作品を持ってきて、先生にサインしてもらった。そして、第12回の児童書ウィークのサプライズとして彼の新しい小説が出版された。

その日のもう一つの大きいイベントはベセルメーニ・ジュラ(Böszörményi Gyula)の大ヒットシリーズ「ルーザー・ラジオ、ブダペスト」(Lúzer rádió, Budapest)の第3巻の出版だった。この小説の主人公は13歳のマルクという男の子で、家族と一緒にブダペストに引越してきて、新しいアパートの屋根裏部屋で古いラジオを見つけて、誰も聞いていないと思って放送を始める。話題にのぼるのはお父さんの新しい職場、ゴシック・ファッションが好きなお姉さんとの問題、隣に住んでいる怖いおばあちゃん、家族の借金、そして屋根裏部屋の窓から見える誰も住んでいないはずの教会の居住者。ベセルメーニ先生の小説にはよく実在する建物、道や人物が描かれている。

ベセルメーニ・ジュラは、11年前に、ハンガリーのハリー・ポッ

ターとも呼ばれた「ゲルゲイとドリームキャッチャー」(Gergő és az álmofogók)という子供向けの小説を書いてから有名になった。ドリームキャッチャーの全13巻には、ハンガリーの伝統や神話と現代の世界を混ぜ合わせて作られた新しい世界が描かれている。現在の読書が好きじゃない子供たちの興味を引いたこのシリーズは、教員にも親にも賞賛された。ベセルメーニ先生は自分のファンと接することを何よりも大事にしている。彼のことを引用すると「私はまだ大人にならずに、ずっと子供のままでいるので、一番話しやすい相手は子供なんだ」とのことである。10年前からサマーキャンプ、短編小説大会、ロールプレイングゲームなどの活動もやっていて、子供の文化を色鮮やかにするための基金も設立した。

私も11年前、彼の小説を読み、彼が作った世界に憧れて、ベセルメーニ先生に初めて会いに行った。彼との友好のお陰でたくさんの友達や思い出が出来て、数え切れないほどの小説を読んで、文学が好きになった。

私は今、こういった作家達の影響を受け、児童文学の研究をしている。文学や芸術が盛んな国はもちろんたくさんあるが、ハンガリーの場合は面積が小さいので、それらがより身近に感じられるといえる。特に、ブダペストに住んでいるなら、有名な歌劇歌手や俳優とよく同じトラムに乗り合わせたり、たまたま同じ医者に通っていたりする。ただし、ほとんどの人は作家と会っても、顔を知らないために、気づかないと思う。学校の教師や親にもブック・ウィークのようなイベントのポスターに気づいて欲しい。子供たちに読書が好きになるチャンスを与えよう!

(ケレケシュ・ジュジャ)



留学生自己紹介

ハンガリーを後にして
古賀 美代子

私が留学先をハンガリーに選んだのには、特別な理由はありませんでした。教育大生として日本の大学に在学していた3年生の冬、周りの同級生が教員採用試験に向けた勉強に励み始めたとき、どうしてもその流



れに乗り切れず、心のどこかで音楽をやりたいと感じていたところ、たまたま札幌でのリスト音楽院入学試験の案内が目にとまったのです。そのチラシを手にとったときには、すでに締切数日前。さらに、指定された範囲内で弾ける曲もないという状況でした。とりあえずこのチャンスにすがってみるしかないと思い、先生にも両親にも相談せず、事務局に問い合わせました。

そのオーディションから半年後、私にとって初めての「音大生」生活は、ハンガリーで始まりました。最初に私が直面した壁は、他の留学生がはっきりとした目的をもってこの地に足を踏み入れているということでした。私には特別ハンガリーを選んだ理由もないし(ハンガリーという国の位置も知らずに飛行機に乗り込んだくらいです)、師事していただきたいピアノの先生もいませんでした。このことに気づき、自分が他の人たちと比べて大きく出遅れていると実感し、この先どうなっていくのだろうと不安が募るばかりでした。

しかし、幸いにも、素晴らしい大好きなピアノの先生と巡り合うことができました。またかねてから挑みたかった室内楽分野でも

素敵な先生に出会うことができ、つくづく私はツイている!と思いました。大学時代、恥ずかしながら教員養成過程のピアノ・レッスンは隔週でわずか10分と考えられないものでしたが、ブダペストでは必然的に音楽に向き合う時間が増え、教授や演奏家、学生と身分に関わらず、「音楽をやっている人たち」に囲まれて生活できたことそれ自

体が、大きな刺激となりました。これは今、過去を振り返ってこそ言えることです。この記事を書いているのは日本に完全帰国をして3日後のことです。自分のブダペスト生活を振り返る機会をいただき、せっかくのチャンスだからと1年分の思いを綴った日記を読み返してみました。すると、楽しかったはずのブダペスト生活が、実は不安と寂しさで葛藤でいっぱいだったということに気づかされました。私が在籍していたパートタイムのコースは、日本でいう科目履修生のような扱いで、単位制ではありません。自分のレッスン以外、すべては自由ということになります。教育大学の4年の前期まで、バタバタと息つく暇もなく学業、演奏活動を両立していた私にとって、そのような自由が手に入るということは、どうやって音楽とだけ真剣に向き合えるのかを試されているも同然でした。

また、音楽だけでなく、自分自身ことや、自分にやれること、自分がハンガリーにいる理由、あらゆることを考えさせられました。1年目の冬は鬱になると先輩方もおっしゃっていましたが、そのとおり、夕方4時には暗くなる自分の部屋で、今なにをするべきか、な

ぜピアノを弾いているのか、どうでもいいようなことまで、考えていた気がします。周囲がみな音楽をやっている中で、私にしかできないこと、「私が」頑張るべきこと、そのようなことを探していたと思います。あまりうまくいかない冬でした。

年があけ2月からの新学期。この頃ようやくハンガリーでの生活に慣れてきたかな、と感じはじめました。季節が暖かくなるにつれ気分も明るくなり、低迷期から少しずつ抜けてきて、この頃からやっと本当に自分の音楽と向き合えるようになった気がします。そして友達が増えてきたのも、この時期でした。それまではあまり人と会ったりすることもなく、大好きなお酒も家でひとりで…(笑)、というのが当たり前だったのですが、友達と遊ぶようになったり、真剣に私の思う音楽観を話してみたり、新しい知り合いも増えたり…、そういうことが重なると楽しくなってくるものです。後半の半年は本当に楽しかった思い出がたくさんです。

9月13日、帰国を前にして、最後に演奏会を企画しました。1年間人前でピアノを弾く機会はそれほど多くなく、なにかひとつ自分の手で作り上げたいという気持ちがあったのと、2ヶ月超にも及ぶバカンス気分を引きずったまま日本に帰るわけにはいかないという思いから、この時期を選びました。演奏について、1年の成果がどうこうか、留学したことによる変化とか、そういうことについて語るつもりはありませんが、何よりも聴衆がたくさん集まってくださり、この地で1年間やってくることができたんだという実感がわき、こみ上げてくるものがありました。改めて、私がたくさんの人に支えられているということを実感しました。この場をお借りし、最後お会いできなかった方たちへも感謝の気持ちを伝えたいと思います。1年間、ありがとうございました。

ハンガリーを後にする時、とても寂しかったです。1年前、なにも知らなかった国とは思えないほどたくさんの思い出の詰まったハンガリーの土地に、ぜひまた来る機会があるといいなあと思っています。

(こが・みよこ リスト音楽院ピアノ科)

留学生

留学生自己紹介

ハンガリーと私

ブダペスト・コルヴィヌス大学ランドスケープ学部 ランドスケープ・庭園芸術学科
修士1年 鈴木 美枝子

今年のハンガリーの夏の終わりは思った以上に早く、日本から帰国し、バスから見た外の景色が早くも秋めいていて少し驚きました。私が初めてハンガリーにやってきたのは、ちょうど同じ頃の3年前、2010年8月の終わりのこと。大学在学中に留学経験を積みたいと思い留学試験を受け、3年生前期からセント・イシュトヴァーン大学の農業学部、サルバシュキャンパスに交換留学生として、10ヶ月間派遣されました。

よく「どうしてハンガリーを選んだのか」と聞かれます。留学経験を積みたかったことが一番ですが、さらに説明しようすると自分とハンガリーがどう繋がってきたかを説明しなければなりません。ハンガリーとの最初の出会いは6歳の時に聴いたブラームスのハンガリー舞曲第5番です。私の心がすぐさま高揚し踊るような気持ちになったのを今でも記憶しています。私は、小さいときから色々に好奇心旺盛で未知なものへの関心が強く、行動して知るまで満足出来ない性格でした。ハンガリー舞曲を聴いて感動したのは、どこか知らない国の一部に触れることが出来たような気持ちになれたからだと思います。

当時、日本にいてハンガリーや東欧に身近に触れる機会はなく、自分で調べることになったのはずっと後のことです。ただ、こうして思い返してみると、体感した経験の背後には、いつも同じところで私を立ち止まらせ、突き動かす何かが、ハンガリーと私の間で通っていたと思います。社会人時代に、たまたま鑑賞したボスニア映画でも同じ感覚を得ました。そこから流れる音楽や目にする景色と世界観。音楽は純粋なハンガリー音楽ではありませんが、その半年後に大学に入学し2年の後期である授業を受けた時、自分の体感とハンガリーが一つの線として繋がったのです。「ハンガリーを学ぶ」の講義をしてくださった姉川雄大先生は、歴史の専門でありなが

ら文化・歴史・日常生活に至るまで限られた時間の中で、ハンガリーについて多くを教えてくださいました。この講義はあの時にみた映画とリンクしながら私を夢中にさせ、気づけば先生に質問をし続ける自分がいました。それから個人的にハンガリー語を先生から習うこととなり、その想いが3ヶ月後に交換留学へと続いていきました。

当時、サルバシュには日本語を話せる人はもちろん、英語も話せる人もほとんどいませんでした。ハンガリー語だけの生活は、好奇心と知りたい気持ちで楽しく過ごすことができ、素朴な暮らし、美しい大地(Táj)は見るごとに私を感動させ、どこか懐かしい気持ちにさせてくれました。しかし、それから数ヶ月経過後からは、言葉の壁を感じ、体調にも影響が出るほど辛い時期に迎えました。留学前に勉強したハンガリー語の成果も出せず、自分から何を話しかけたらいいのかも分からず、自信が消えそうになりました。しかし、諦めずに授業後に復習を続け、ハンガリー語から英語、それでも分からなければ日本語から調べるという作業を延



々と繰り返しました。

物覚えの悪い私は、自分の言葉として使えるまで時間がかかりますが、これまでの苦労が実って、今使っている語彙に活かすことができると実感しています。また、ハンガリー語しか話せなく私との会話が通じないの分かっているのに、一緒にいてくれた友人たちの優しさは忘れられません。ほんの小さな私の周りの世界ですが、彼らはかけがえのない時間を私に与えてくれました。この国の小さな町にやってきた初めて見る外国人に対して、親身に接してくれた彼等

の温かさは、私にとっては計り知れない助けになりました。今でもこの温かい関係が続いています。

日本に帰国して、卒業論文の研究テーマをブダペスト市内のある地域を対象として選びました。留学の成果として、ハンガリーに関わる論文と設計をやり遂げることで、私にとってのハンガリーが何なのかをきちんと整理したかったのです。半年で仕上げることがはたいへんでしたが、設計案は関東の学生コンペティションの学部代表として選ばれ、入賞することができました。

終わりに、人生はもちろん、自分の為にありますが、目的にはいつも自分との関わりがあり、それが喜びや生きる目的となり大きな力に変わることがあると思います。今年の2月より、ブダペスト・コルヴィヌス大学のランドスケープ学部の修士課程に所属し、ランドスケープや庭園学、都市計画を勉強しています。人との関わりの中で形を生んでいくこの分野は、ハンガリーを知ることを深め、自分の立ち位置をはっきりさせてくれます。そうやって修士論文を書き進めていくこ

とに大きな意味を感じています。今のブダペストでの生活はサルバシュで感じたようなものとは違います。ここには都市の生活があり、正規入学した学生の扱いは厳しいものです。ハンガリー人に囲まれた授業、失敗だらけ分からないことだらけで、自分を見失うことも多々あった春学期を終え、これからまた秋学期が始まります。そして、未だ尽きないハンガリーと私の関係はこれからも続いていくのです。

(すずき・みえこ)

留学生

日本人留学生状況と動向

桑名 一恵

ここハンガリーでは毎年、多くの日本人留学生が各都市・各学校へ留学しています。

その留学先も年々、様々な分野に広がっています。

主な留学先は、リスト音楽院(音楽・音楽教育)、ハンガリー国立バレエアカデミー(バレエ・各舞踊)、バロシュ・バーリント語学学校(ハンガリー語)、コルヴィヌス大学(経済・園芸・食物)、ブダペスト商科大学、セント・イシュトバーン大学(医学)、エトヴェシュ・ローランド大学(合唱指揮・ハンガリー語学科)、センメルヴァイス医学大学、コダーイ研究所(音楽教育)、デブレツェン大学(語学・音楽・ハンガリー学科)、パーチ大学(医学・語学・音楽)など。こ留学以外にも研修などで現代舞踊やスポーツ・教育関係などへ来ハンされる方々も多くなりました。

ハンガリー国内で国立バレエ団や各オーケストラ、サーカチーム、水球など正式メンバーとして、すでに活躍されている方々もいます。最近では各受け入れ先の大学や大学院で、卒業後にハンガリーの音楽学校や教育現

場でハンガリー人と共に勤務されている方も増えている傾向にあります。

ハンガリーを去った方々に、留学終了後の動向を聞いたところ、基本的には日本へ帰国される方が大半のようです。その一部を紹介させていただきます。

【芸術分野】

- ・自主公演や企画公演に精力的に出演し、セルフマネージメントを高め活動の場を広げている。
- ・オーケストラなど、ジャンル別就職先のオーディションなどを受ける。
- ・各都市の音楽教室へ就職・または個人音楽教室を開く。
- ・各学校(中学・高校・大学)の教員募集に応募し、教員または講師として活動している。
- ・各都市の芸術分野での親善大使や芸術企画の中心人物として貢献されている。

【医療】

- ・卒業後大半の方が日本の医師国家試験を受け、国家試験合格後は研修医を2年間行う事が義務づけられている。
- ・U S M L E というアメリカの医師国家試験を受ける。
- ・ハンガリーの医師免許は E U 27カ国で有

効ですので、もちろん各ヨーロッパ諸国で勤務されている方も少なくはない。

【教育】

- ・教員免許を取得し、各教育現場で両国の言語学・歴史・文化などを取り入れた教育法などの積極的な活動をされている。
- ・国際交流の場を多く持つような活動をしている。

【その他の分野】

- ・経営者として起業する。
- ・各企業への即戦力として就職

全ての情報が集められたわけではありませんが、多くの皆さん各国・各都市・各ジャンルでアクティブに活動されていることが分かり、ハンガリーと日本の両国を何かしらの形で繋げているのだということがわかりました。また、ハンガリー側が日本人に対して受け入れ体制が整っていることや、日本側もハンガリーの皆様を様々な形で受け入れていける状態になっていることも、詳しく知ることができました。

情報を提供してくださったすべての皆様へ感謝の意を申し上げます。

(くわな・かずえ)



日本語広場



子供と遊ぶボランティア「日本語広場」

栗田 順子

ハンガリーに嫁いで13年。3人の子供に恵まれ、育児歴は11年。そんな私が友人と細々と続けているボランティアがあります。それは、「日本語広場」と称する、親子で日本文化に親しむためのクラブ活動です。

日本語広場は、みどりの丘補習校と同じ校舎内の一室で、月に2回、幼児サークル終了後、11時15分から12時30分、活動しています。第一部はわらべ歌とリトミック、第二部は紙芝居、そして第三部は、親子工作教室の3部構成になっています。四季折々、日本の文化に触れながら、親子で一緒に遊ぶことを目的としています。私達がしているボランティアとは、具体的に書いてしまうと、いろいろあるのですが、大まかに言うと、その企画、準備、そして、開催日の進行役です。

このボランティアを始めたのは、遡ること、長女が補習校に入学

した4年前の秋。娘が入学してから、毎週土曜日の朝は、補習校に通うため、時にはイライラしながら慌しく支度をし、家を出発。田舎町からブダペストまでの片道30km以上の道のりを送り迎えすることになりました。送り迎えのための自宅とブダペスト2区の2往復は、あまりにも時間とコストがかかることから、補習校が終わるまでの娘の待ち時間を如何に有意義に過ごすかを考えた末、私と友人は、夫達の応援に背中を押され、2009年10月、この日本語広場を創設しました。

このボランティアを始めたことで、この日本語広場にはメリットがあることに気づきました。一つは、子供達にとって補習校入学前の準備期間になっているという点です。みどりの丘補習校と同じ校舎での活動しているため、幼児サークルや日本語広場に通っている子供達はみどりの丘補習校に通っている児童、生徒さんとの休み時間に交流を持つことで先輩と知り合い、補習校の雰囲気にも慣れることができます。そして、入学前から同級生のお友達もでき、一緒に補習校入学への心の準備ができます。



日本語広場



二つ目は、遊びの可能性が広がる点です。専業主婦の方も、お仕事されている方も、平日は、子供の送り迎え、夕方は家事に追われ、子供と一緒に遊ぶ時間も遊びの種類も限られてしまいがちです。広場では、わが子と日本語と一緒に遊べるだけでなく、お友達と一緒に遊ぶことで、遊べる種類が何倍に広がります。例えば、「とおりゃんせ」や「はないちもんめ」は親子だけでは遊べませんが、広場で友達と一緒に遊べます。

どのような活動をしているか、一部紹介します。導入では、出席確認。子供の数と大人の数と一緒に大きな声で数えて、ちょっとした足し算を一緒にします。それから、新しいお友達紹介をし、新しく参加したお友達の紹介と自己紹介の歌を歌い、みんなで、一人ずつのお名前を読んであげます。名前を呼ばれた子はお返事をしますが、いつも子供達は動物と化し、猫や豚になったり、時には、恐竜になった気分でお返事をしてくれます。

第一部のわらべ歌の時間では「かごめかごめ」、「はないちもんめ」、「とおりゃんせ」、手遊びでは親子やお友達同士で組になって一緒に遊びます。時には、体を使って踊ることもします。いろいろやってきた中で、子供達の一番人気は「あぶくたった」です。どの子も、鬼になりたくて、いつも鬼は一人でなく2~3人の複数。[とんとんとん]「何の音？」に続く子供達の想像豊かなさまざまな音は、かわいらしかったり、奇想天外であったりして、お父さん、お母さんを大いに笑わせてくれます。

第二部の紙芝居は子供達が一番好きな時間。紙芝居が始まる前に必ず、「始まるよったらはじまるよ」の歌を歌い、子供達は両手をひざに置き、紙芝居が始まります。手がおひざにあるのはほんの一瞬ですが、紙芝居を聞いている間、子供達は静かに椅子に座り、まだ小さい子はお母さんに抱っこしてもらいながら、紙芝居に穴が開くのではないかと思われるほど、紙芝居をじっくり見て、お話しの世界に入り込んでくれます。たいいて二つ、三つ読んであげますが、子供達にとっては物足りないようです。

そして、第三部の親子工作教室。この工作教室では、日本の四季、文化行事関連のものを作るため、一年を通して、毎回作るものが違い、バリエーションに富んでいます。2月なら節分。鬼のお面作



り、豆まきもします。3月には折り紙でお雛様を作り。4月はお花見のダンゴ作り。調理室を借りて、親子お料理教室でお団子作りをしたこともあります。5月はこどもの日。こいのぼり作りや兜作りです。今まで、心の残っているのは、五月晴れのさわやかな日、校庭に大きな模造紙を広げ、子供達に手に絵の具をべったりつけ、巨大こいのぼりを一つ作りました。4年間続けていると流石にネタ切れになることもあり、インターネットでいろいろ調べることも多々あります。そんなときに、NHKの番組から、お父さん(お母さん)スイッチと一緒に作り、親子発表会をしたことは楽しい思い出の一つとなっています。

2014年3月、末の子が幼稚園を卒園し、4月にみどりの丘補習校に入学します。そろそろ、このボランティアもバトンタッチする時期が近づきつつあります。

保母の資格を持っているわけでもなく、先輩もいなければ、マニュアルがあるわけでもなく、ゼロからのスタートでしたが、この4年間のボランティア活動を続けられたのは、私自身、無理せず、ストレスをためず、楽しんでいたこともありますが、何よりも参加者がいてくださったおかげであると思っています。当たり前のことですが、参加者なくして、クラブは成り立ちません。土曜日で休みたい日でも、子供達と一緒に遊ぶために足を運んでくださる方がいてくれるからこそ、続けることができました。紙芝居をもっと

読んで!とおねだりしてくれる子供達、親子と一緒に工作し、完成した時の達成感、出来上がった物を高く掲げ「これ見て!」と満足げに作品を見せてくれる子供達。日本語広場には、楽しい時間を共有できる仲間と出会えるクラブあると思っています。

日本語広場参加者はとても国際的な親子が多く、日本人、ハンガリー人だけではなくありません。国境、世代を超え、とてもバラエティーに富んでいます。外国で暮らしているゆえ、日本文化に触れる機会が限られた環境の中で育った子供達が、この日本語広場で、親子で一緒に何かを作ったという思い出が心の糧となり、健やかに成長し、お友達と一緒に遊んだ手遊びや一緒に歌ったわらべ歌を、将来、次の世代へわらべ歌を伝承してくれたらいいな...と願っています。

(くりた・じゅんこ)



ブダペスト日本人学校ふれあい大運動会

組体操と責任

中学部3年 坂下 竜一

あの日の空には、清々しい青が限りなく広がっていた。しかし裏腹に、私の心は重苦しい緊張に支配されていた。中学部3年生としての、団長として責任感に潰されてしまっただけなのである。あれだけ必死に練習を繰り返したのだから、どうして緊張する必要があったのだろうか。今そう思えないのは、組体操が大成を収めたからだろう。

練習や本番を通して私が一番難しかったと感じたのはやはり、男子だけで作る「三段タワー」だ。その最中が緊張のピークだったことを、私は鮮明に覚えている。先ほど「



どうして」と述べたが、この技だけは別だ。何しろ、練習の中でも「成功した」と言えるのは、片手で数えられる程だったのだから。それでも、無事作り上げることができた。その際の、そして組体操を終えた後の達成感や安心感といえば、1、2年生の時の比ではなかった。

今後生きていく上で、今まで以上に大きな責任がのしかかって来ることが必ずやあるだろう。その時、今回の経験をバネにして潰れないよう、挫けないようにしたい。

(さかした・りゅういち)

白組応援練習

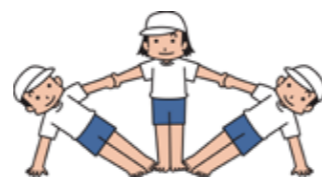
中学部3年 中野 佑紀

「団長、責任重大だなあ」。応援合戦の練習の時のことだ。まず初めに、団長の私からの言葉。「みんなで紅組に負けないように応援の練習をしっかりといきましょう」と言った。練習が始まると、「やばい、かなり緊張してる」と感じた。私は、練習が始まる前日、こう考えた。中学部4人で手分けして小学部に教えたほうが早いのではないか。それを、そのまま実行すると、意外とうまくいった。でも、私は、時間をもっと有効に使えばもっと上手にできるなと感じた。そこで、翌日、もう一度練習方法を考えた。けれど、なかなか、いい案が見つからない。「どうし

よう」そして、ほかの中学部の仲間と話し合った。すると、「時間を決めて今日はどこまで練習するのか決めたほうがいい」という案が出た。「なるほど」、私は、反省した。もう少し深く考えれば同じようなことを自分一人でも考えることができたと思ったからだ。そして、すぐ仲間に頼るのではなくまずは自分でじっくり考えるべきだと思った。翌日の練習は、スムーズに終わった。それを繰り返していくことで、なっとくのできる応援にすることができたので達成感を味わえた。

運動会を通して、すぐ仲間に頼るのではなく自分で粘り強く考えることの大切さを学んだ。そして、今後の活動でも、粘り強く取り組み、いい結果を出していきたいと思う。

(なかの・ゆき)



拍手かっさい

小学部6年 弘田 うらら

アナウンスが入った。私たちは円じんを組み、気合を入れる。

9月15日、日ごろの練習の成果を発揮する日。私達は、この運動会に向けて、日々練習をしてきた。

そんな中、特に気合を入れたのが組体操だった。しかし、一人技から二人技、三人技とどんどん人数が増えていく。私は、三人技の「飛行機」という技に苦労した。それは、上で体をのぼし、うでものぼしていなければならぬからだ。初めてやってみた時、体は曲がり、うでもたえきれず、曲がってしまった。しかし、練習を重ねるうち、体もうでもまっすぐになった。嬉しかった。まだ、全員ピラミッドや三段タワーといった大技が残っていたが、「飛行機」だけでも達成感があった。

たくさんの練習を積み重ね、そして迎えた本番。そんなに緊張しなかった。むしろ、日頃の練習の成果を、お父さんやお母さん、そして妹に見てもらえるのが嬉しかった。

「ピッ」

仲川先生が笛を吹く。みんながパッと倒れる。そうしているうちに、「飛行機」の番がきた。見事に決まった。大きな拍手が起こる。全員ピラミッドは、一番下の段なので少し待たなければいけない。

「ピッ」

完成の笛がなる。私たち全員が顔を上げる。またまた拍手のうずが起きる。三段タワーが終わった後、私の胸は達成感と嬉しさでいっぱいだった。

「ありがとうございました。」

そう言った後、つい笑顔になってしまった。

運動会の結果は、準優勝だったけど、みんなの笑顔が輝いてみえた。笑顔のうちに終わって、とてもよかった。

(ひろた・うらら)

スポーツ・エッセイ

欧州サッカー事情

盛田 常夫

高騰する移籍市場

新しいシーズンに入った欧州サッカー界。夏の移籍市場では巨額の大金が舞った。筆頭はレアル・マドリードに移籍したベイル。移籍金は、実に1億ユーロ。レアルはこの資金捻出のために、ドイツ代表のウジルをほぼ5千万ユーロでアーセナルに売却した。5億ユーロの累積負債を抱えていると見られるレアルが、なぜ、これほどの大金を使って次々と選手を抱え込むのだろうか。ふつうのビジネス感覚ではとうてい理解不能である。

今年の夏の移籍金額ランキングで30位ですら3千万ユーロというから、サッカー界の移籍市場は賑わいを見せている。ところが、モスクワチェスカの本田は冬のラツィオとの商談不成立に続き、今夏もインターミランとの移籍交渉が決裂した。インターミランが提示した移籍金額はわずか200万ユーロだが、チェスカの要求額とは3～400万ユーロの差だったから、他の移籍交渉に比べれば端金の差。誰しも夏の移籍は確実と思っていたら、チェスカが態度を硬化させて、交渉が進まなかった。いかにあと半年で契約が切れる選手とはいえ、あまりに低い提示額に怒ったようだ。

ラツィオといい、インターミランといい、イタリア・セリエAチームの台所事情は苦しそうだ。数百万ユーロの差額を日本のスポンサーが支援したり、本田の年俸を削って契約金に充てたりするという情報が流れていたが、こういう筋違いの話がまことしやかに流れるほど、セリエAのチーム事情は苦しいのだろう。しかも、本田陣営が先走って、インターミランといろいろな約束をしてしまったことも、チェスカの機嫌を損ねたと考えられる。

他方、気になるのは、その程度の金額で買える本田に、欧州の他のチームがまったく関心を示さなかったことだ。本田レベルの選手ならいくらでもいると考えているのだろう。それでも、冬の移籍市場で「移籍金がゼロになれば、考えてもよい」というチームはいるだろう。そうなれば、イタリアは避けた方がよい。もうセリエAは凋落リーグだ。数百万ユーロをケチったインターミランに、未練をもつこともないだろう。

プレミアリーグの難しさ

マンチェスターUの香川をめぐる状況が不明瞭だ。リーグ戦が始まって5試合の時点で、まだ出番がない。リーグ戦開幕直前に、リーガ・エスパニョーラのアトレティコ・マドリードへの期限付き移籍情報が流れた。モイーズ新監督のチーム構想の中では、香川にスタメンが保証されておらず、左MFの二番手三番手の控えの位置づけなのだ。

ファーガソン監督時代も香川の起用に一貫性がなかったが、主力扱いを受けていた。ところが、モイーズ体制では「控えの控え」という位置づけだ。

モイーズ監督は香川のプレーをそれほど見ているわけではない。にもかかわらず、香川の起用を回避するのは、ウイングとしてフィジカルが弱いと判断しているからだろう。体力勝負に出てくるプレミアリーグでは、体の小ささが気になるのだろう。身長がなくても、体重があってがっちりしていれば問題ないが、香川はいかにもひ弱な体躯。香川はそのハンディを補うべく、素早いボールタッチと変幻自在の位置取りで、チャンスを演出するのだが、それが生きるのはウイングではない。ファーガソンが香川を取ったのは、パスサッカーという要素を入れて、チームの攻撃に変化を付けるためだったが、新任のモイーズは「ひ弱な香川」を信頼することができず、旧来通りのフィジカルで押すサッカーを続けている。しかも、伝統あるチームを任された重圧から、新しい方向を試すというリスクを冒したくないのだ。

皮肉なことに、このモイーズ監督の安全路線が、リーグ戦序盤で苦戦を強いられている。5戦を終え2勝2敗1分けで8位に低迷している。とくに第5戦のダービーマッチで、マンチェスターCに4-1で完敗し、交代枠を使い切らず敗戦したモイーズの戦術に厳しい目が向けられている。モイーズがファンベルシー頼りの従来の戦術を続行するのか、それとも控えの戦力を積極的に試して戦術を変えてくるのか、監督としての力量が試される。さらに苦戦が続けば、モイーズ監督の地位は微妙になる。昨年のブンデスリーガでも、長谷部は10週連続出番がなかったが、監督交代とともにスタメンに復帰した。マンチェスターUで

の香川の冷遇が続けば、ドルトムントへの復帰も視野に入ってくる。

昨年までサウサンプトンでCBのスタメンを張っていた吉田は、今シーズンは初めからベンチ外の扱いを受けている。吉田も「控えの控え」の位置づけである。サウサンプトンは好調を維持しているから、吉田の出番は当分ないだろう。

二度の大きな怪我から回復した宮市が、とうとうアーセナルでデビューを果たした。若手育成に定評のあるベンゲル監督の下で、長身快足のFWが順調に伸びてこれば、代表チームの大きな武器になる。

日本人選手が活躍するブンデスリーガ

ブンデスリーガへの適応に失敗した宇佐美貴史やリーグ戦途中から加わって定位置を見つけれず日本へ戻った大前元紀、ポルトガル2部に移籍した金崎夢生には運がなかった。他方、細貝は控えに甘んじることなく、レヴァークーゼンから移籍してヘルタ・ベルリンの主力選手になった。長谷部も長年在籍したヴォルフスブルグから清武がいるニュルンベルクへ移籍し、ヴォランテの定位置を確保した。

昨年は控えが多かったハノーファーの酒井宏樹は、今シーズンはスタメンを確保している。シュトゥットガルトの酒井高徳も、昨年同様、開幕からスタメンで出場している。シャルケの内田やニュルンベルクの清武はチームの主力選手になっており、清武にはプレミアリーグから移籍の誘いもあるほど注目されている。フランクフルトの乾も主力選手扱いだが、90分間任されていないのが気になる。

出場機会を求めて、シュトゥットガルトからマインツに移籍した岡崎は、まだ結果がでない。FWだからゴールがなければ、アピールできない。厳しい定位置争いが続いている。

これだけ日本人選手がいるブンデスリーガのゲームには、必ず日本人選手を見ることが出来る。金曜日の午後から日曜日の夜まで、Eurosport2でブンデスリーガの試合を楽しむことができる。

(もりた・つねお)

ゴルフ雑感@ハンガリー

町野 憲善

9月初旬のある晴れやかな日にその日がやってきた。

「10月末を以って、帰任、同時に退職」と、そのことは、事前に充分予想が出来ていたとはいえ、いざそれを聞くと、心に空気が出来たような寂しい思いが湧いてきた。

サラリーマンとして充実した毎日を思い出すより、「町野さん、時間ですよ!!」と聞いたようで、言葉に表せない空虚感が体中を駆け巡った。一方で、ピッチの中を90分間フルに、休み無く動き、更にアディショナルタイムもあったから良しとするか、と頭をよぎった。

思い起こせば、2003年4月にハンガリーに異動し、既に10年と7ヶ月になろうとしている。当然のように、その期間は長かったし、短くもあった。しかし、短かった感が勝っている。その理由はゴルフだ。

飽きるほどパンノニアに通ったはずだが、まだまだ通える。満喫していない。ヤットここ数ヶ月、90台前半のスコアが出始め、年間数回あるかないかの、80台のビッグスコアの可能性に手が届くまでに「流れ」は自分に向かいかけている。その証拠に、9月、並み居る豪傑を負かし、最年長(多分)優勝を勝ち取った。この流れの来るのが遅かった。10年間掛かった。しかしまだ流れの向きは変わっていない。まだ1ヶ月ある。気象条件が悪化する中で、何とか80台前半の自己ベストを。

これまで、パンノニアに何回通った事か、記録はないが、400回前後だろう。私以上に通っているゴルファーを知っている。彼らは私の現在完了と違い、まだまだ現在進行形だから700回以上は可能だ。

思い起こせば色んなことがあったゴルフ場だ。

人間耐久ゴルフ。1日に3ラウンド回ろうとの話がでて、実行した。40歳代後半から60歳前半までの4名。真夏。熱中症を心配して、電動カートの出番。

その日はクラブ主催の公式コンペが組まれていて、思うように回れなかった。先ずは1ラウンド目、これは全員難なくクリア。スコアは2桁の人と3桁の人が半々。

2ラウンド目、さすが、後半となると、カートでもきつくなる。何とか公式コンペとバッテングせず、回った。スコアは2桁が1名。3人が3桁。カートの速度が落ちてきた。

3ラウンド目、インに入ると、コンペの最終組に追いつく。それを避けて空いているコースを選び、カートを走らせる。そして、



また元へ戻る。最初に参ったのが、電動カートだ。回り道をしているため、ついに1台のバッテリー上がり。その時点で残りのホールは5ホール。まだ元気な1台に4セットのバックをのせ、運転手のみ。3人は歩き。



何とか日没を前に、継ぎはぎで54ホール完走した。3ラウンド目は全員が3桁のスコア。

その日に昼食を取ったか今は覚えていない。それでも、もうこりごりだとは思わなかった。また、チャンスがあればチャレンジしたかった。

次は4カ国対抗戦。

この対抗戦は確か、チェコのJETROの

提唱で2006年から開始されたと記憶している。チェコ、スロバキア、オーストリア、ハンガリーの4カ国のチーム戦と個人戦である。最近では各国の持ち回り幹事で、幹事国のコースを使い、年間の最大行事として、今年は8回目を数えた。

過去のハンガリーチームの成績は優勝1回と不本意である。私はこのコンペを大人の遠足にたとえ、無性に楽しく、1泊2日の遠征は待ちどろしく、年間の最優先イベントの位置づけである。

しかし、仕事の調整が付かず、1回だけ、欠席した。その時にハンガリーは優勝した。私が参戦した時は常に優勝を逃がしている。2回のホームの試合でも優勝を逃がしている。その当時の成績を見て、私が、チームの足を引っ張っているとは思わないが、貢献しているような成績でもない。

来年の9回大会はホームでの開催である。残念ながら私は出席できないが勝てる大会となると予想する。「ホームであること。前夜祭ができないこと。町野欠席のこと」。勝てる3拍子が揃っている。

本帰国後は、冬場を除いたシーズンでも、月1回ゴルファー以下に落ち着くと思う。何故、ここでは、毎週末、5時半起きでそそくさとゴルフ場に向かうのか?趣味を同じくする人と心底面白く、可笑しく楽しく時間を過ごせることが、すばらしい。

ゴルフは楽しいが、周りの人達との会話はもっと楽しい。

あるハンガリー駐在の先輩がパンノニアは何回プレーしても飽きない。最高のコースだ。その言葉に異論は全く無い。もっと飽きないことは、すばらしい人達との会話。これに尽きる。

最近、雨の日が多くなり、グリーンの状態が最高に仕上がってきた。プレーの機会は残り少なくなったが、その貴重な時間を仲間と大事にしよう。

(まちの・のりよし マジャールスズキ)

3回目の四カ国対抗親善ゴルフ大会を終えて

畑山 建吾

7月21日(日曜日)のその日は来しました。総勢17名で乗り込んだオーストリア。事前に都合で2名減ってしまいましたが参加四カ国中で最大規模。ハンガリーチームの意気込みが現れていました。幹事の方々からも流石ハンガリーチーム本気ですねと言われる程でした。「はいそうです。120%本気で勝ちに行くんです」とは口には出しませんが心の中でつぶやいていました。

今年は柿崎部長の号令の下、本気で勝つための準備をしてきました。貸し切りバスを廃止し、「大人の遠足」(「ドナウの四季」2013夏季号)ではないことを参加メンバー全員に知らしめました。本選で戸惑わないように、いつも練習しているパンノニアコースだけでなく、本コースでも事前練習を行いました。さらにメンバー選考会と称して週末に行った練習会のスコアを毎回集計しました。これにより個人のレベルをメンバー内で共有し、危機感を煽り、各人が自発的にレベルアップ図り、友達を失ってでも80台を出して行くような環境づくりを行いました。また、今年はD社からの強力助っ人も事前の作戦通りきちんと確保しました。もちろん私自身も本気で勝ちに行く気持ちはできていました。今まで貢献できずにいましたから。

初年度は何も分からず参加し、大人の遠足の流れにまかれてしまい飲むほうに忙しく結果を出せずに終わりました。昨年度は、名誉挽回とシーズン開始当初から意気込み、早めに練習をスタートして順調なゴルフシーズンのスタート。しかしながら自らの不注意で目の怪我をしてしまい、参戦するのがやっとなってしまいました。チームも準優勝で悔しさが倍増でした。前年までの体たらくで、「畑山さんは個人では活躍するがチームに貢献しない」、「あの人は全然本番に活躍しない」という痛いお言葉もいただき、今年こそはと雪辱に本当に燃えていました。

例年弾けてしまう決起集会という名の飲

み会も、持ち込みのアルコールなどが無かったせいなのか粛々と執り行われました。会では部長からの指示通り、本コースのビデオ上映会なども行い、本気モードの決起集会となりメンバーの士気は高まっていました。そしてその日はとうとう来てしまいました。



2013年ハンガリーチーム

気持ちの良い天気の下、私は1番ホールスタート。ティーショットはナイスショット。よし今日はいけるとの手ごたえ。何だかんだダブルボギーになってしまったものの、ショットの感じは良いので焦りはまったくありません。前半の9ホールは若干悪いが想定範囲内で収まり、さあ後半の9ホールへきっちり仕上げるぞ、とメンバー全員で誓った掟通り休憩時のビールは控え、10番ホールスタート!

「あれっ、あれっ、あれっ」、何故かティーショットが吸い込まれるようにO.B.へ飛んでいく。「後半の方が易しかったはずなのにどうして?」とつぶやいた時には大叩きが決まっていました。準備万端のはずが3年目で一番悪いスコアになってしまいました。うなだれる私に追い討ちをかけるメンバーの言葉「えーまた駄目だったの?」、「なんだかねー駄目だったのですよねー。あっはっはっ」と聞き直るくらいしか出来ない私。内心ゴルフ止めようかと思うくらいの落ち込みです。

でもまだまだチームが負けたわけじゃないとなんとか正気を取り戻して各自のスコ

アを確認。試合後都合がつかず先に帰ってしまったメンバー等もあり、錯綜する情報の中で、結構良い線行っている事分かってきました。「よし!もしなんとか優勝できたら、あまり責められないぞ」と、他力本願モードに切り替える私。そして運命の結果発表の時がきました。

上位8名のスコアが各国の1位から順に出されていきます。やはり思ったとおり大接戦でした。「もしかして行ける?」と皆も思い出したところで出ました最終結果、なんと4打差で(ハンガリー542打対チェコ538打)でチェコが優勝。「4打差って、、、」。非情な結果にメンバーも結果論にしかならないと分かっていながらつぶやきを止めること

ができません。あそこで俺がO.B打たなければ、急遽欠場になったK氏やT氏が来ていれば、等等。私も後半の9ホールのドライバーショットを悔やんでも悔やみきれません。他力本願が崩れ完全に戦犯確定です。個人的には名誉挽回に大失敗、チームとしても優勝を逃し、私にはまた大変苦しい夏になりましたが、前向きに考えれば、前年あった18打の差を今年は4打まで縮めたので、今年行った強化プログラムは間違っていないと言えます。そして来年度に予定されている、ハンガリーでの自国開催に向けて、今年培った強化プログラムを踏襲し、着実に各個人のレベルアップを図っていけば「来年は絶対」と自信を持って臨める大会になるでしょう。

個人的にはイギリス・メキシコ・ハンガリーとゴルフ生活を続けていますが、ハンガリーでの日本人ゴルフ部の月例会や大吉杯マッチプレー等、イベント的にも、メンバー的にもゴルフに対する向上心を刺激する環境が大変素晴らしいと感じています。四カ国対抗戦が盛り上がる理由の一つだと思います。

皆様のご声援ありがとうございました。来年も是非応援をよろしく願います。

(はたやま・けんご ソニー)

スポーツ行事・運動サークル情報

ゴルフ部

2013年度、公式行事活動報告 (2013.09.12記)

- 月例会 <優勝> <2位> <3位>
- ・3月 山下(竹中工務店) 竹内(寿)(マジヤールズキ) 渡辺(Suzuki Vilag)
- ・4月 鈴木(竹中工務店) 横平(菱和) 畑山(ソニ)
- ・5月 井上(ブリジストン) 柿崎(マジヤールズキ) 藤井(Eurasia)
- ・6月 大浦(マジヤールズキ) 畑山(ソニ) 飯尾(大吉)
- ・7月 鈴木(竹中工務店) 勝川(菱和) 栗原(スタル)
- ・8月 町野(マジヤールズキ) 川口(日本人学校) 北折(竹中工務店)
- ・9月 竹田(同志社大学) 阿部(大気社) 竹内(尚)(マジヤールズキ)

○第8回四カ国対抗戦：7月21日開催(於オーストリア)
優勝：チェコチーム、2位：ハンガリー、3位：スロバキア、4位：オーストリー

○第18回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権(春季大会) = ゴルフ部後援 = 優勝：渡辺(Suzuki Vilag)、2位：竹内(マジヤールズキ)、3位：坂下(ブリジストン)

○第19回「大吉杯」ゴルフマッチプレー選手権(秋季大会) = ゴルフ部後援 = 現在 2回戦、3回戦を開催中(10月末までに勝者決定)

<部員募集>

月例会ゴルフコンペ、マッチプレーなどの各イベント、週末の練習会などを精力的に実施しております。ビギナー、女性部員も大歓迎ですので、ゴルフにご興味のある方は下記連絡先までお気軽にお問い合わせ下さい。(連絡先：ユーラシア・ロジスティクス 藤井 akihiro.fujii@eurasia.hu)

編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。

<http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

バドミントン部

部員： 中学校の体育館の2面を借りて、毎週日曜日に2時間程度の活動をしています。運動不足の素人おじさんに加え、女性と子供が数名で合計10名前後です。その他、時々参加される方が10名程います。

場所と時間： 毎日曜日の午後4時から2時間。
中学校体育館(ブダペスト2区、Kokeny u. 44.)

内容： はじめの30分間は練習、その後ダブルスの試合を行っています。経験者も数名いるので、初心者への打ち方指導もやっています。

ラケット： 会場で貸し出し出来ますので、室内シューズを持ってきて頂ければいつでも参加可能です。

参加費： 当面1,000HUF/人(試合に参加しない子供はタダ)でやっています。

その他の活動： ウィーン日本人バドミントンクラブとの交流会、飲み会など。

代表者： 池田耕平

問合せ先： hujpbad@gmail.com

日曜テニス部

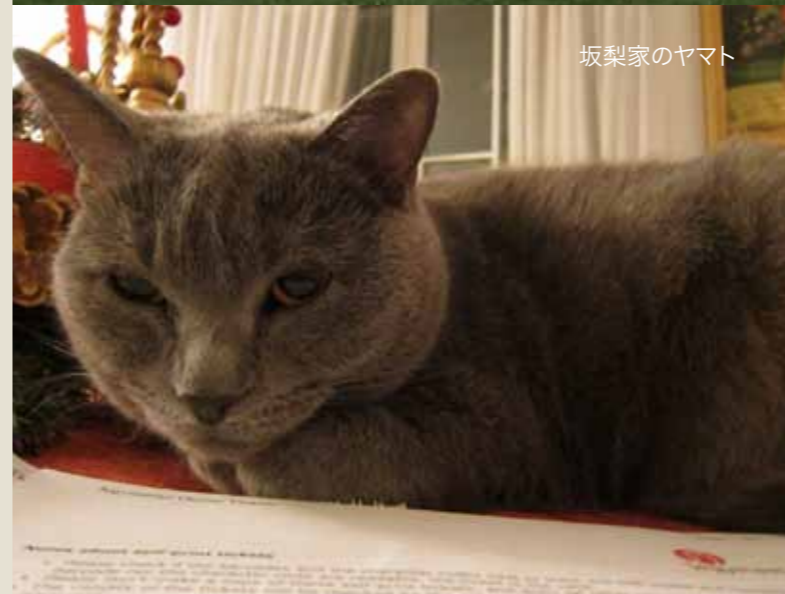
現在の部員数： 21名(男性17名、女性4名)

活動場所と時間帯： 毎日曜日午前9時~11時
Match-point tennis Club
(<http://www.matchpoint.hu/english/main.html>)

本年度の実施予定活動： 日曜日
： テニス以外の各種親睦会(随時)

幹事連絡先： 伊勢雅尚メールアドレス
(m.ise@idakaevurope.cz)

部員募集： 現在は部員数が多く、基本的に募集をしておりませんが、但し、「女性で初心者」は別途相談とさせていただきます。幹事まで一報ください。



坂梨家のヤマト



坂梨家のムサシ



日本語広場

『夢』で繋がる熱い思い

～ in 鈴鹿サーキット～

9月22日WTCC世界ツーリングカー選手権第10ラウンドが。鈴鹿サーキットで決勝のレース1が行われ、ゼンゲー・モータースポーツ(ハンガリー)専属ドライバーのミヘリス・ノルベルト(ホンダ・シビックWTCC)が、ポール・トゥ・ウイン(ポールポジションからスタートしてレースでも優勝することを指す)で今季初優勝を挙げた。WTCC日本ラウンドは、「格闘技レース」と呼ばれるWTCCらしい激しいバトルが繰り広げられた。

前日の公式予選でポール・ポジションを獲得したミヘリス(Hondaシビック)は序盤から後続を引き離し、後続のバトルに巻き込まれることなく完ぺきなレース運びでポール・トゥ・ウインを決めた。 昨年の日本ラウンドでデビューしたHondaシビックは今シーズン、フル参戦を果たし、ここまでに2勝を挙げる活躍を見せていた。そしてHondaの地元鈴鹿で見事3勝目を記録した。

ミヘリス・ノルベルト(29歳)氏の『夢』は、WTCC日本戦で叶う事に。現地では、多くの日本人ファンがミヘリス氏のゴールを待っていた。今回応援にかけつけた一人でもある野田勝彦氏は、昨年度までブダペスト日本人学校教員としてハンガリーの地で3年間勤務し、フンガロリングでもWTCC観戦経験があり、Honda車に『夢』の文字を書いた人物。きっかけは同僚の日原美由紀氏より、ゼンゲーチームのために是非“書”を書いてくれないか?と依頼されたこと。『夢』という書を選んだ理由は、HONDAが作った最初のバイクの名前が「ドリーム号」だった事やHonda創設者である本田総一郎氏の「叶わない夢を追うからこそ、男は目標に向かい走り続けるのだ」という言葉から。このようなストーリーがチームの思いや信念に一致するのでは、ということから『夢』という漢字に決定。野田氏の書き上げた書の中から、一週間をかけてミヘリス氏自身が最終的にヘルメットやボディーを飾る『夢』の文字を選んだ。

ミヘリス氏は、本当に「夢」を現実のものへ。彼は、日本戦第1戦で誰も追いつくことの出来なかった事について、次のようにコメント。

「今日は自分にとって、最高の日となりました!車のボディーにある『夢』の漢字の通り、Honda地元の鈴鹿サーキットで優勝でき、自分の夢を叶える事ができました。チームが一丸となって調整してくれたおかげで、車のコンディションは最高でした。昨年フンガロリングで優勝した時以来の感激です。今日の成功のために、チームは頑張ってきました。だから、そんな苦労のあとにある今日の優勝が本当にうれしいです!」

(情報資料・訳:Blikk、日原 美由紀、WTCCホームページより)

